

ヒマラヤ

No.362



2002 JANUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2002年H A J サマー・キャンプ隊員募集

桑頂抗沙峰 (6,590 m)

チベットのラサから北北東（直線距離で約135 km）に美しい山容の山があります。周囲の山々を睥睨するかのように峻立するその姿は、白い雲にまとわれて見る者は息をのまざるを得ません。

この山は1992年日本隊によって初登頂されていますが、その後登山隊の消息はありません。

そこを舞台にサマー・キャンプを実施します。

記

1. 期 間:2002年7月20日～8月16日(28日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:70万円
4. 〆切り:定員になり次第
5. 資格:冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人



ニンチン・カンサ(7,206 m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。H A J は既に3回登頂に成功しています。ルートは1998年にH A J 隊が初登攀した西稜を予定しています。

記

1. 期間:2002年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 資格:冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り:定員になり次第
6. その他:H A J の登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。

表紙写真

ヤンラ・カンリ(7,429m)の北面から短いラマ氷河がラマプーに流れ落ちている。そこから仲間達が苦闘しているヤンラ・カンリ北東支稜と東稜を望むことが出来る。振り返ると今もっと注目されている未踏のランプー・カンリ(6,668m)の南岩稜が3 km上に樹林越しに聳え立っていた。

(文と写真:山森 欣一)

ヒマラヤ No.362

1. ニンチン・カンサ(7,206 m)西稜第2登
16. 2001年 パキスタン登山隊結果
18. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
20. 2002年H A J 登山隊隊員募集
21. K 2 入山者〔1975－2000＝26年間〕
24. 寸感・事務局日誌

ニンチン・カンサ(7206m)西稜第2登

——— 今世紀初のH A J 隊登頂成功 ———



▲B Cからの南西稜／左端奥が頂上

はじめに

本隊は、創立35年目を迎えた日本ヒマラヤ協会が派遣した、今世紀初めてのヒマラヤ登山隊です。この一つの節目となる・記念すべき隊としては、「絶対に頂上は踏む」という不退転の決意で望みました。

幸せなことに、8月15日、3人の隊員が頂上に立つことができました。アタック・キャンプに戻るまで、実に16時間以上もの悪戦苦闘を強いられた末の成功です。翌日、2次隊もアタック・キャンプに入ったのですが、その晩からの荒天により断念しました。

当協会が、ニンチン・カンサにサマー・キャンプ隊を送るのは、今回で3度目です。97年には、天城徹彦隊長ら13人が栃木ルートから入り、9人が登頂し、98年には関根幸次隊長ら10人が未踏の

西稜から入り、3人が登頂しています。

我々の隊は、これらの2隊のノウハウを最大限に生かしました。とくに、西稜にルートを取ったため、キャンプの位置も98年隊と全く同じ所でした。『ヒマラヤ325号』をバイブルのように活用させていただきました。

「こんなすばらしい稜に、最初のラインを引けた98年隊は幸せだな」が、今回の登攀隊長野沢井の感慨です。

この登山隊も多くの方々のご支援を受けました。出発までは、派遣母体の日本ヒマラヤ協会の事務局、現地においては中国登山協会、四川省登山協会、西藏登山協会等々、更には、壮行会にも多くの方々に参加していただきました。ありがとうございました。また、隊員のご家族の方々にも厚くお礼申し上げます。(記・酒井 國光)

行動記錄

1. 目標の山

中華人民共和國、西藏自治区浪卡子県／江孜
県 ニンチン・カンサ峰（寧青崗沙・Ningq
in Kangsha 7,206m）

2. 登山期間

2001年7月20日～8月25日（37日間）

3. 登山の目的

- 1) ニンチン・カンサ峰の西稜からの登頂
- 2) 山岳自然環境の保全

(テイクイン、テイクアウトの実践)

4. 結果

- 1) 8月15日、3名が登頂に成功する。
- 2) 持ち込んだ物のほとんどを回収し町まで下ろして処分した。

5. 隊の構成

隊長 酒井 國光 (62歳) 茨 城

登攀隊長 野沢井 歩 (36歳) 神奈川

隊 員 日南長二郎（46歳） 広島

” 宮川 真一（38歳）神奈川

“ 齋藤 正朗 (30歳) 東 京

” 志村真由美（29歳） 神奈川

連絡官 趙 玲玲 (女性・CMA)

コック 余 偉

ベースキャンプまで

7月20日(金) 成田→北京

東京駅に到着後、足早にH A J ルームに急ぐ。ルームには野沢井登攀隊長はじめ宮川、斎藤、志村の各隊員が揃い談笑中であつた。今回のサマーキャンプ隊には最近では珍しく若い人が多く参加している。それでも平均年齢は40.2才で、隊長と私で40代に引き上げてしまった。

成田空港行きのバス停まで、今夏の猛暑の中リヤカーで荷物の運搬を2往復すると全員汗まみれになる。そのせいかどうかバス乗車時係員にチケットの提出を求められた際、英語で話しかけられる。全員が日本人に見えなかったのか、ある人が日本人離れしていたのかは今となっては定かではない。

成田空港に到着すると、山森理事長、酒井隊長と奥さんが既に来ていた。

荷物の預け入れカウンター付近で、サインを求められる田部井さんを見かける。女性だけのパーティで中国のムスタグ・アタ峰に登るとのこと。

荷物を預けた後待合所に戻ると、野沢井が男女2人組と親しく話をしている。なんと山野井夫妻で、野沢井とは冬場富士山測候所に2人で荷揚げの強力をしているので、気心の知れた仲のようだ。山野井夫妻はパキスタンのラトック山群の岩壁に挑むそうだ。

CA926便はほぼ定刻到北京空港に到着し、中国登山協会のスタッフの出迎えを受ける。日本を発するまで連絡官が誰になるか不明であったが、この時97年ニンチン・カンサ隊の連絡官を務めた趙玲玲さんとの情報が入った。

7月21日(土) 北京→成都

成都へのフライトが早いため、7時前に食事を終え、足早にマイクロバスに乗り込む。北京市内は、08年オリンピック開催が決まり、各地で道路整備や区画事業が行われている。オリンピックが始まるころには、市内の状況はかなり変化していることだろう。

成都空港で四川省登山協会スタッフの出迎えを受け、マイクロバスで市内のホテルに向かう。



▲ラサ～ニンチン・カンサ概念図

夕方登山協会のスタッフと共に夕食に出掛ける。夕食後は各自自由行動となり、サウナに入りに行く人、中国人女性と日中友好の親睦？に出掛ける等自由に過ごす。

7月22日(日) 成都-拉薩

今日も早朝のフライトのため、食事も取らずに暗いうちからホテルを後にする。

成都空港を飛びたちしばらくすると、右手に4つの峰からなるスークーニャンが見える。左手にはミニヤ・コンカラしき山並みが確認出来た。眼下に見える山々に白い雪が目立ち始めたころ、機内の気圧が変化し始めるのを感じる。クンガ空港が標高3,600m有るので、気圧の調整をしていると思われる。

空港でチベット登山協会のスタッフの出迎えを受ける。早々にトラックに荷物を積み込み、2台のランクルに分乗しラサ市内に向かう。途中の小さな町で、公安の指示により空地に車を停車させられた。今年はチベット和平開放50周年記念の年に当たり、ラサでいろいろな行事を行うらしく、しばらくすると中国政府等の要人を乗せた車が公安の車を先頭に猛スピードで走り抜けて行った。

ヒマラヤホテルに到着後、午後は自由行動と決まる。私は高度に体を慣らすため、ホテル近くのラサ川周辺を散策して過ごした。

7月23日(月) 買い出し、隊荷整理

朝目覚めても顕著な高度障害を感じない。98年に来たときは激しい頭痛と嘔吐で七転八倒したものだが、今回は6月に入ってから出発までに富士山に5回登ったのと、出発前より胃酸を抑える胃薬を服用したのが良い結果をもたらしたと思われる。

午前中は趙玲玲さん、コックのヨンさんに同行してもらい食糧調達のためラサ市内の市場やスーパーを飛び回る。主食の米がインディカ米が多く日本人の口に合うジャポニカ種がなかなか見つからない。何軒か回ってようやく日本米に近いジャポニカ種を購入することができた。慎重に選んだのが幸いして、日本米に近い味で非常に食べやすいと皆さんに好評を得た。

午後はチベット登山協会の倉庫で隊荷の整理、確認、梱包を行った。

▼西藏登山協会の中庭にて隊荷の整理



7月24日(火) 高所順応

今日は午前中高所順応のためラサ川対岸にある山に登る。野沢井、宮川、斎藤は調子がよくどんどん先に行ってしまう。少し遅れて志村もマイペースで登っている。私は調子が悪くはないもののペースが上がらず、4名よりかなり遅れてしまう。無理をして頂上に行き調子をくずすと良くないので、4名が降りて来るのを休憩しながら待つことにする。

酒井隊長はホテルに残り、ラサまで同行した山森理事長は本日11時に帰国の途についた。

午後、昨日整理梱包しておいた隊荷をトラックに積み込む。

7月25日(水) 拉薩→ランカーズ

ランカーズまでの移動日だが、志村が高熱を出してしまい、大事を取りラサに留まることになる。志村に見送られてホテルを出発する。カンパ・ラ(峠)からヤムドク湖の向こうに見えるニンチン・カンサを期待したが、雲に隠れ見ることが出来ない。

ランカーズの招待所に宿泊を依頼するも断られ、やむなく近くの民福旅館に宿を取る。

7月26日(木) マヨン村へ偵察

酒井隊長が日本から引きずっていた咳が止まらず調子が悪いため、一旦ラサに下り病院にて診察してもらうことになる。

隊長を見送った後、マヨン村まで下見に出掛ける。平原をしばらく走ると狭まり谷間の登りとなる。登りきったところがカロ・ラで、右手にニンチン・カンサ末端の氷河が見える。カロ・ラより15分程度下った所より公路を右に折れ、川を渡り

10分程度でマヨン村に着く。

マヨン村でヤク工と打ち合わせの後、さらに1 km程度奥まで偵察に行く。BCまでさほど困難な道程ではなさそうだ。

7月27日(金) 再び拉薩へ

ランカーズ入りした時から頭痛が始め、未明に嘔吐してしまう。拉薩から高度差1,000 mも一気に上がったのが良くなかったようだ。朝、野沢井登攀隊長に依頼しラサに下ることにする。

拉薩で志村に出迎えられ、その足で「人民解放軍西藏軍区総医院」に入院している酒井隊長を見舞う。

今日は志村がランカーズ入りのため、25日とは逆に私がホテルより見送りをする。

本日、本隊はランカーズ滞在。

7月28日(土) 本隊BC入り

今日はホテル近くを散策しながら過ごす。

昼過ぎ、酒井隊長がホテルヘシャワーを借りに來た。昼食を共にし、相談の結果、明日昼頃出発しランカーズに入ることにする。

本日、本隊はランカーズからBC入り。

7月29日(日) 全員BC入り

27日の夜は頭痛により熟睡出来なかったが、28日より調子が戻ったのか頭痛もなく熟睡できた。昼前酒井隊長が退院(気管支炎で3晩入院)してきて、ラサを後にする。

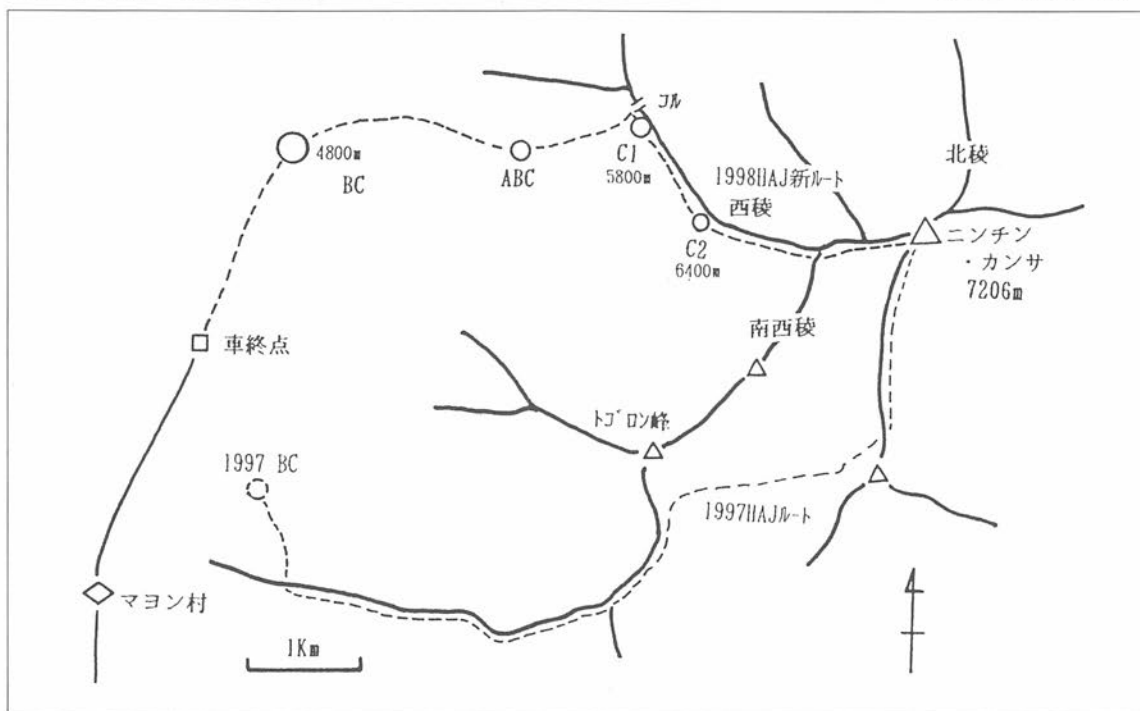
15:30頃ランカーズに到着。民福旅館には、本隊と一緒にBC入りしていると思った志村がまだ居た。ランカーズに1泊では順応出来ないとの野沢井登攀隊長の判断で2泊して、今日私達の乗って來た車でBC入りを指示されたとのこと。酒井隊長と相談して、2人とも事前にランカーズに宿泊しているため、このままBC入りしても問題はないだろうとの判断で3名揃ってBC入りすることとする。

マヨン村で趙連絡官に出迎えられる。マヨン村の奥1 km程度入った所で車を下車する。草原を1時間余り歩き、小高い丘の上に登りきると眼下に7張りのテントが見えた。

本隊のメンバーに出迎えられ、これで全員が揃うことになる。夕刻より全員でベースキャンプ開きを行い、酒を酌み交わす。

さあ、明日より登山活動の開始だ。

(記: 日南長二郎)



▲ ニンチン・カンサ西面概念図

登山活動(BC～C2)

〈登攀計画〉

今回、私達のとったルート(西稜)'98年H A J隊によって初登攀されたルートである。このルートは短くすっきりと南西稜上へと突き上げる好ルートで関根隊長を始め'98年隊の着眼は素晴らしい。この'98年隊の報告「ヒマラヤ325号」にはルート状態、ピッチ数など事細かに記載され、私達はそれを大いに参考に登る事が出来た。

(未知なるルートに登る楽しみを味わえた'98年隊が羨ましい…)

BCは当初、'98年隊のABC(5200m)まで上げる事も考えた。それは天候不順の夏季、少しでも短い日数を有効に使いたいと思っていたからだ。しかし結局'98年隊同様4800m地点をBCとした。ここは氷河湖から流れる沢の河岸段丘上の草地でニンチン・カンサを望めるロケーションにある。結果的にこのBCは標高的にも精神的にも体を休める事が出来るオアシスとなった。

私達は'98年隊がABC(5200m)とした地点をRC(リレーキャンプ)とし、荷物のデポ地点、非常時の宿泊地とした。

C1は'98年隊同様、西稜のコル(5800m)地点。C2は西稜上6400m地点の小プラトー上に設置した。2つのパーティーが各キャンプでダブらないように調節したので各キャンプは一張りのテントで済み、結果荷上げ量の軽減に繋がった。

C1～C2間には固定ロープを張り、C2～頂上間には固定ロープを張らない計画とした。C2が建設されたらBCで休養後2次に渡ってアタッ

▼BCはこんな所だった



クする計画である。

今回スムーズに日程通りの行動が出来たのは、今年のニンチン・カンサは比較的天候に恵まれ、行動に支障が出る悪天が少なかったのが大きな要因だろう。

〈行動概要〉

7月30日(月) BC～RC

快晴。予定通りBC入りした野沢井、宮川、斎藤の3名でRCへのルート偵察へ出発。遅れてBC入りとなった酒井、日南、志村はBC整理にあたる。

RCはBCから更に一本北側の谷の小さな氷河湖畔となる。BCから沢を適当な所から横切り、隣の谷へと入る。草原状のルートにはブルーポピーを始め高山植物が咲き乱れ、鹿やウサギといった小動物も多い。目印とするケルンを積みながら登る。最後の詰めはエンドモレーンのガレ場となるが、特に問題も無く、小さな氷河湖畔へ到着。氷河湖のすぐ上部には滝が掛かり更にその上は西稜



▲BCに勢揃いした隊員・中国側スタッフ



▲BC～C1間にて

から落ちる氷河が掛かっている。湖畔をRCとしてBCへ下る。

7月31日(火) RCへ荷揚げ

全員でRCへの荷揚げ。

8月1日(水) C1へのルート工作

野沢井、宮川、斎藤はRCへ移動。酒井、日南、志村はRCへの荷揚げ。

RC到着後、滝を抜け西稜へ至るルートを偵察。下から観察した通り、滝は下段を左岸から大きく右岸へトラバース。簡単なガレ場を登り滝を大きく高巻き滝上へと出る。そこから先は岩雪崩が起きそうなガレ場をだましだまし登る。しばらく登り詰めると一旦傾斜は緩くなるが更にコルまでは広い急斜面のガレ場となる。斜面には結構雪が積もっておりそこからは登山靴へ履き替える事となる。取りあえず本日の偵察はここまでにしてRCへと戻る。

帰路、滝上に引っ掛かっている古いPPロープを発見した。約5P程のロープに曲がったスノーバーも付いている。おそらく'98年隊が張った西稜のロープがここまで流されてきたものと思われる。改めて計り知れない自然の力を感じさせられた。'98年隊の報告では田村氏の固定ロープ回収の苦労話が心を打つ。その時の未回収ロープはこうして月日と共に回収出来、田村氏の「環境に対する志」を完結する事が出来嬉しい。ちなみにこのロープはBCへ降ろし「チンコウ酒」へと変った。

8月2日(木) C1建設

野沢井、宮川、斎藤でC1への荷揚げ。酒井、日南、志村はBCレスト。



▲氷河湖のほとりにRCを置く

▼氷河湖の上は瀧場を左にトラバース



1時間程で先日の緩傾斜地点へ到着。そこで登山靴に履き替える。とにかく長い急峻な大斜面が西稜のコルまで続いている。それでもこの大斜面、今年は'98年時と比べかなり雪が積もっている為比較的楽に登る事が出来たのではないかと思う。時折落石が音を立てずに我々を襲う。

大斜面も最後は岩稜に挟まれ狭くなった雪壁となりコルに至る。コルの反対側は切れ落ち、北西稜の急峻な屋根、長大な北稜と北西側のルートが一望出来る。ニンチン・カンサの山嶺の大きさを感ずる。

コルへ一足先に着いた私はそこを整地し幕場を作る。実は勘違いしておりこのコルの狭い場所を必死に整地したのだが、更に少し西稜を登った地点に絶好の幕場があったのだった。結局、後日そこへ移される事になる。

8月3日(金) A隊C1への荷揚げ

野沢井、宮川、斎藤で再度C1への荷揚げ。コルに一張りテントを建てると駆ける様に一挙にBCまで下った。酒井、日南、志村はRCへ移動。



▲瀧場の上から氷河湖を俯瞰する

▼西稜のコル目指して



8月4日（土） B隊C1へ荷揚げ

野沢井、宮川、斎藤はBCレスト。私達は初めてのレストとなる。青空の下、ビール、チンコウ酒を飲みながら山を眺める贅沢な休養日。BCには連日、マヨン村の子供達が訪れる。さすがに少々うとうとしが彼等のテリトリーに侵入しているのは我々の方なので仕方ない。

酒井、日南、志村はC1への荷揚げ。酒井隊長は日本から引きずってきている咳が一向に回復の兆しが無く、大変苦しそうであったが、どうにかC1まで登った。

8月5日（日）A隊C1へ移動

野沢井、宮川、斎藤はC1移動。日南、志村はRCからC1への荷揚げ後BCへ下山。酒井隊長はやはり咳がひどくC1への荷揚げは断念。我々もRCで隊長と談笑した後C1へ。先行した日南、志村によってC1は安全な場所に移されていた。

8月6日（月） C2へのルート工作

野沢井、宮川、斎藤はC2へのルート工作。いよいよここからが本格的な登山開始である。8時50分、私達は一人PPロープを5本、スノーバー7本ずつを持って出発。30分程平坦な西稜を進み、幾分傾斜が出てくる地点より固定ロープを張りながら登る。登るにつれて次第に傾斜が出てくるが特に問題なく黙々と固定ロープを張りながら登る。南西稜上のピークが少しずつ近づいてくる。天候もまずまずでBCからは私達の行動が丸見えである。

15時40分、予定通り15P全て張り終えた。最後はスノーバーが足りなくなったので代わりにピッケルを打ち込みC1へと下降する。

▼C1と西稜／左手奥が頂上



8月7日（火） 停滞

昨夜から降り出した雪は一向に止む気配がない。それならば先日ががんばってC2への残り数ピッチを張っておけば良かったと悔やまれる。C1移動予定だった、日南、志村パーティーも停滞を決めた。我々も停滞とする。高所キャンプでの停滞は退屈である、そして決まって食べ物の話に花が咲く。夕方から天候が回復、明日こそはC2を建設し一挙にBCまで降りよう！

8月8日（水） C2建設

予想通り天候は回復した。C2建設を目指し固定ロープをたどる。このルート傾斜が緩い為かロープの掘り起こしが大変である。

15P先よりさらに3Pロープを固定すると傾斜は緩くなり、C2予定地の小プラトーへと到着した。

これでC2への荷揚げが終わればいよいよ頂上アタック開始である。

C2へ下降すると既に日南、志村が移動してきた。酒井隊長は咳がひどくC1には上がらず、R



▲西稜を登る（C2手前）

Cに宿泊する事となった。C1でお茶を飲んでいるとあっという間に激しい雷雨。ヘルメットに雹がコツコツと当たる。いそいでRCへと下る。隊長と打ち合せをしてBCへ。

8月8日は私の37歳のバースデイ。連絡官の玲さんがケーキを焼いて祝ってくれた。

(記：野沢井歩)

アタック前後

8月9日(木) B隊C2へ荷揚げ

昨晩はかなり冷え込んだ。一晚中胸を押えながら咳をしつづけた私は、今回の登頂を断念せざるを得なかった。快晴の朝を迎え、皮肉にも目指す山がくっきりと浮かび上がっているではないか。

昨晩、C1に泊まった日南、志村はC2へ荷揚げを行う。

酒井は昨晩の雪・霰が岩場から消えるのを待って後、デポ地へ私物の荷下げに往復した。さらに、荷揚げの2人がC1へ帰着するのを確認してから、雷を恐れながら、空身でBCへ駆け下った。

8月10日(金) B隊BCへ

昨日C2へ荷揚げをした2人がBCへ下った。これでアタック体制が整った。夕食前のミーティングで予定を発表する。

A隊…野沢井、宮川、斎藤、

12日BC発、14日頂上アタック

B隊…日南、志村、(野沢井サポート)

14日BC発、16日頂上アタック

8月11日(土) BC

明日からの行動に備え、思い思いに過ごす。

8月12日(日) 停滞

昨夕からの雨が降り止まず、終日降り続いた。アタックの日程を全て1日ずらす。

8月13日(月) A隊C1へ

朝のうちは雨が残っていた。とにかくC1に入ろうとA隊は10時過ぎ出発。

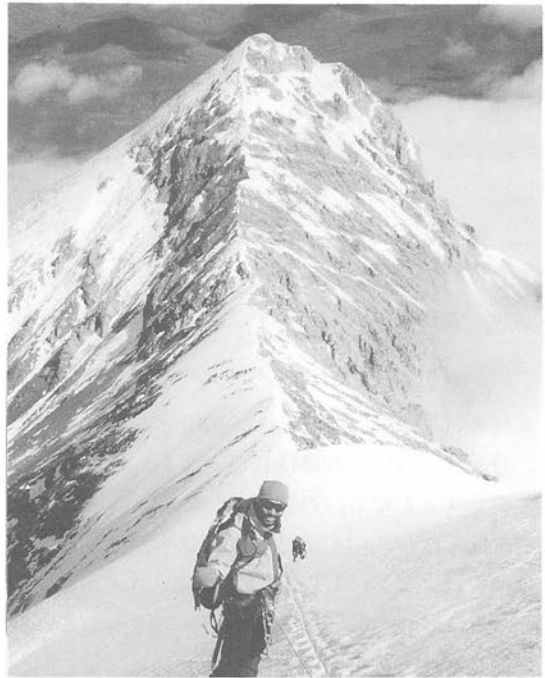
酒井は、志村に手伝ってもらってRCにある個人装備の荷下げに行く。

8月14日(火) A隊C2へ

A隊大変な苦勞をしてC2に入る。

「数日間の悪天の為かロープはモナカ雪の下に埋まってしまい掘り出しに苦勞させられた。しか

▼C2への登り。バックは西稜末端5978m峰



も登高器は雪が付着し全く用をなさず、ゴボウ状態での掘り起こし作業である」と、野沢井は書いている。

8月15日(水) ニンチン・カンサ登頂

アタック隊とBCとの交信記録

(BCは5時より無線オープン)

6:45の交信

4:40頃アタックに出発。満天の星、谷は雲海。台座のような所に來たので交信をした。調子良い。

9時の定時交信

頂稜へ2時間位の所か。雪の状態の悪い箇所がある。

11時の定時交信

正面の岩場が越えられない。もっと右へ行くのか、とのことなので、反対に左へ行くと上部へ抜けられることを指示。

11時45分の交信

頂上稜線に出た。時間も早く、天気も良い。先のルートも悪くない。何とか3人で頂上へ行きたい。

12:12の交信

3人揃ったので、頂上へ向かう。

13:50の交信

前衛峰と主峰のコルに居る。疲れがひどい。

14:22の交信

疲れて、コルから頂上の半分位の所にいる。ガスが出てきて、下りが心配だ。

15:03の交信

ニンチン・カンサ登頂！ 登頂時刻は以下の通り。

野沢井(15:02)、宮川(15:09)、斎藤(15:31)

16:53の交信

分岐へ来た。後続を待って下る。

17:31の交信

3人揃ったので下降する。

※下降中のアタック隊は、BCよりプリズムにて終始確認できた。

21時の交信

アタック隊C2に戻る。

8月16日(木) BC隊2へ

昨日C1へ登った日南、志村の2人は第2次アタック隊としてC2に入る。

昨日登頂した野沢井は、2次隊のサポートをするべくC2に残った。

宮川、斎藤の2名はC1を撤収してBCに帰着した。

夜半から雷雨が激しくなり、朝方まで続いた。

8月17日(金) 第2次アタック断念

C2とBCとの交信記録

(BCは4時より無線オープン)

4:07の交信

昨夜来の風雪により出発を見合わせて待機中。トレールは完全に埋まっている。

現在、BCの高度計は4,800mを指している。

5時の定時交信

待機中。BCの高度計は先程と変化なし。

6時の定時交信

天候が悪いためアタック中止を決定した。数時間仮眠してから下山する。

11:08の交信

これから下山を開始する。宮川、斎藤がRCまでサポートに登る。

13:32の交信

FiXの始点に着いた。8本回収した。

15:29の交信

今からRCを出てBCに下る。

16:13、全員BCに下山し、ビールで登頂を祝した。

8月18日(土) 天気の変化目まぐるしい

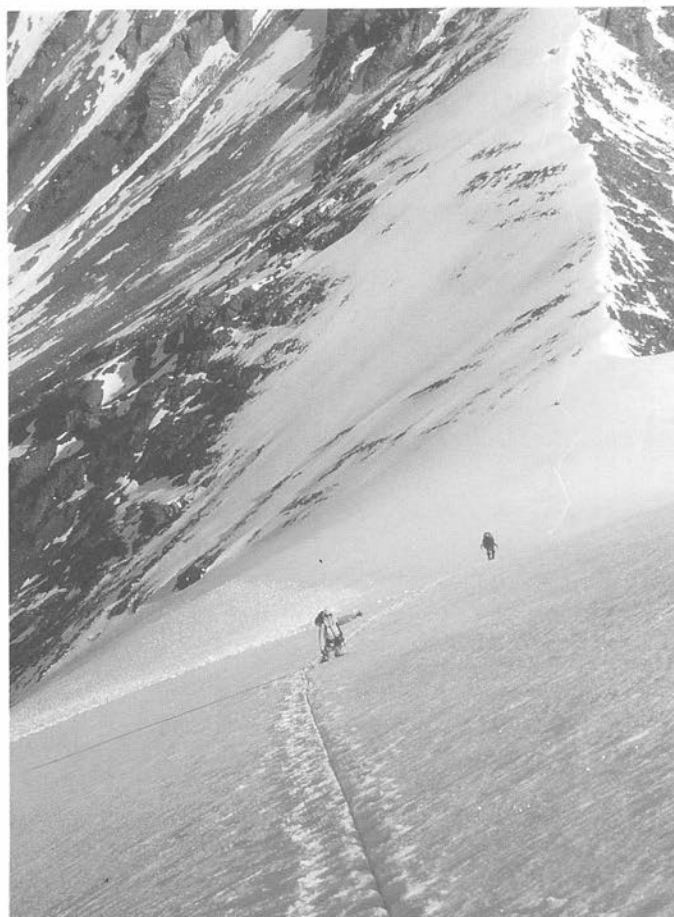
隊荷の整理をし始めたが降雨。テントで横になっていると日差しが強くなり、暑い。午後、雨、雷、強い日差し、雨…と、天気の変化が目まぐるしい。

8月19日(日) 隊荷整理

終日降ったり止んだりの天気。それでも、隊員はゴミ燃しに忙しい。いよいよ明日は山を去る日だ。今まで15回も海外登山をしてきたが、BCでこんなにゴロゴロしていたのは初めてだ。

(そろそろ引き時かな…)と、ちょっと感傷的にもなってしまった。

(記: 酒井國光)



▲AC～C2間を登る第2次アタック隊

登頂記（1）

8月15日午前3時起床。無風快晴。夜は期待感と不安感、緊張感とでほとんど一睡も出来ず終い。それでも頭痛もなく異常も見あたらないので“一晩くらい眠らなくても大丈夫”とすぐに起きて朝食の準備に取り掛かる。食欲は余り無いので、水分を多く取るようにするだけの朝食とする。

テントの外に出ると、ヒンヤリと空気が冷たい。フリースを着るかどうか迷ったが、動いている内に暖かくなるだろうとシャツ2枚とカップだけを着る（結果的にこれが失敗だった）。

午前4時半出発。天気は良く、星も月も綺麗に出ているのだが、月は三日月よりも細いため、それほど明るくはない。FIXは張ってないので、3人ザイルでコンテし、自分は最後に出発する。思い返せば、初めてのヒマラヤ遠征で、自分の体調の正確な診断も出来ず、良くここまでたどり着いたものだと、感慨に浸る。

C2前面の雪面を黙々と登っていく。最初は息苦しいなりに付いて行けたが、次第に足取りが重くなり、ザイルの余裕分もなくなってしまった。山に入ってからずっとそうだったのだが、相変わ



▲頂上アタック前日・C2にて

らず喉の調子が悪く、咳が止まらない。声を出そうとするとよけいひどく咳が出る。寒さも段々肌身に凍みてきた。手足の指先、特に手の指先が冷たい。片方の手でピッケルを持ちながら、もう片方の手はグローブの中でグーを作って暖める。

それにしても前の2人（野沢井、宮川）は何であんなに普通に登っていられるのだろうか（自分がそう勝手に思っているのだが）？苦しくないのか？ミトンのオーバ手でもしているのか？やっぱ高いグラブ買って来るべきだったかな。などと下らないことを考えてしまう。

午前10時10分、ようやくコル直下の岩場に取り付く。寒い！日はとくに昇っているのに西稜であるが故に日が全く当たらない。前の2人がルートを切り開いている間、体の震えが止まらず無線連絡で岩場の左がすぐ抜けられると知り、回り込んで稜線を目指した頃にはすっかり余裕がなくなってしまった。

午後12時50分、ようやくコルに出る。日差しが心地良い。今までの寒さが嘘のように体が温まってくる。南方には北稜とのジャンクションピークと本峰がはっきりと見える。思ったよりも近そうだ。ザックをデポし余力を振り絞って頂上へと向かう。しかし、空気が薄く足が思うように前に出ない。昨晚一睡もしていないので眠気も強烈に襲ってくる。何度も立ち止まりようやく本峰の取り付けに到着。そこでアイゼンをデポする。もう前の2人はすでにピークに向けて出発している。付いていかないと登頂できないと焦り、慌てて付いてゆく。もう登攀隊長は最後の雪壁を登っている。姿がピークの先に消えた。次は宮川隊員の番だ。一步一步確実に登ってゆき、同じく姿が消えた。いよいよ自分の番だ。ゆっくりと登ってゆくが、このときが一番近いようで遠くに感じた。

午後15時30分、登頂！思わず両手を天に突き上げガッツポーズをする。憧れていたヒマラヤの登頂。山を始めて3年余りで登頂できるなんて夢にも思わなかった。大部分が周りに助けられての登頂だが、今確かに自分の足で立っている。無線越しに隊長の声が聞こえてきた。感謝の言葉を何度も口にし、同時に実感も沸いてくる。

ようやく一息ついたのもつかの間、時間も遅い

のすぐ下降に入る。天気もちょうどガスってきた。疲労困憊のため特に慎重に下りてゆく。この下りがまた大変であった。足に力が入らず、何度もへたり込みそうになる。コルの下降点に付いたときはすでに登攀隊長がFIXを張る準備を終えていた。あたりは薄暗くなっている。足がもつれそうになりながらも、慎重に懸垂下降してゆく。さすがに13時間近くも行動しているため、“ビバークでも良い”などと弱気になるが、あとは下降だけなので、気力を保ち足を動かす。FIXを5本張り終えて、後はスノーバー残置で懸垂下降してゆく。もうテントは近くに見えるのだが、なかなか距離が縮まらない。ようやくコンテで下りられる所まで来た。ゆっくりと3人一緒になって下降してゆく。

午後9時、やっとC2に到着。ホントに疲れた。スパッツもアイゼンも脱ぐ気がしなく、しばらくの間座り込んでしまった。その間今までのことを振り返って、いろいろと思いをめぐらした。決して体調が良かったわけではないが、なんとか予定通りの行動に付いてゆけたこと。RCからC1への荷揚げが大変だったこと。始めてFIXを使って登ったこと。これら高所での体験がはじめてなので、全てのことが深く心に刻み込まれた。いろいろ他の隊員の方には迷惑をかけ、助けられ、心から感謝の気持ちでいっぱいになった。登攀隊長には抱きつきたかったが、恥ずかしいのでやめた。BCの隊長にも抱きつきたいのだが、これも止めておこう。いずれにしろ早くBCまで下りたい。そしてゆっくり寝たい。暖かいコーヒーをすすりながらいろんなことを考えていた。



▲頂上の隊員（右斎藤、左宮川）

今回のキャンプに参加してホントに良かったと思う。隊員の方々を始め、HAJの方々、周りの人々、そして誓約書に印を押してくれた親、全てに心から感謝する次第である。

（記：斎藤 正朗）

登頂記（2）

悩んだ末に、ぼくはC2に、シュラフとマットは持っていけない事にした。今考えると、自分自身を過信していたのかも知れない。結局、それが失敗だった。6,400mでのシュラフカバーだけというのは、ほとんど眠ることができない。

ぼくらは、ほんの少しのクッキーを食べると、星空の下でロープを結んだ。ここから先はルートワークはしていない。下降用にPPロープを2本づつと、スノーバーを3本づつザックに収め、野沢井さんを先頭に、果てしないラッセルが始まった。時計は4時を少しだけまわっていた。

やがて夜が白み始めてくると、ぼくたちの眼下にはチベットの山並みが広がった。何とも言えない気持ちだった。ここまで来れた事。何度も何度も夢にまで見たこのヒマラヤに、自分自身がいる事。そして何よりもぼく自身、今、頂上に向かって登っている事。すべてがとても嬉しくて、充実感でいっぱいだった。

けれども、そのあたりからぼくらは予定ルートから外れ、右に迂回せざるをえなくなってしまった。雪面の状態がとても悪く、先頭に行く野沢井さんが、腰まで埋まって泳ぐように雪にまみれている。硬い雪面を求めて蹴りこむ足元からは、「ドンッ」と、薄気味悪い音が何度かする。「雪崩れるかも知れない」誰もがそう感じた時、ぼくらは、右にトラバースをせざるをえなかったんだ。

そして、頂稜線をふさぐような形で覆い被さっている岩稜帯に行く手を阻まれた。果敢にも野沢井さんは突っ込んで行く。ミドルのぼくも彼に続いて、入って行く。後方では斎藤君がアックスビレイをしている。

「俺たちのどちらかがヘマしたら、3人ともっていかれちゃうだろうな」ぼくはそんなことを考えていた。でもぼくらから見た限りではそのルートしかなかった。

雪面の状態が最悪に近かった。ロックピトンが欲しかった。「ここまでかよ。こんな所で時間切れかよ」と、ぼくが勝手に感じていた時、ベースキャンプで双眼鏡を覗いていた酒井隊長から、無線を通じてのルートの手指示があった。指示どおり左にトラバースすると、少し急な雪面になり、それを登りつめると頂稜線にでた。太陽がサンサンと輝いていた。まだ正午を少しまわったばかりだった。

ぼくらはそこでザックをデポし、空身で山頂を目指した。天候はだんだんと怪しくなり、何度かガスで山頂が隠れてしまったけれど、ぼくらはその見えない山頂に向かって進んだ。

ニセピークから少し下降して本ピークに取り付く。先頭に行く野沢井さんに追いつけない。全力を出しても、アンザイレンしているロープは張り、どうしても野沢井さんに負担をかけてしまう。ぼくは初めて弱気になってしまった。「どうやら俺、ここまでみたい。もう力が出ないよ」そんな様な事を口に出してしまった。振り返ると斎藤君も、ぼく同様にへばっている。

ぼくらはそこでアンザイレンを解いた。野沢井さんはロープをズルズルと引きずりながら、それでも後続するぼくらのためにステップを大きく刻みながら山頂に向かった。

ぼくと斎藤君は、最後の力を振り絞って、そのあとに続く。野沢井さんの配慮がうれしかった。

山頂直下の半ピッチで、ぼくはようやく野沢井さんに追いつき、ピレイをした。やがて野沢井さんはぼくの視界から消え、しばらくするとホイッスルが聞こえた。



▲西稜最終ピッチを登る

▼南西稜ジャンクションピークから見る南方



きっとあそこが山頂なんだ。ぼくらはあそこを目指して今まで頑張ってきたんだ。何があるんだろう。どうなっているんだろう。ぼくはあそこに立ったとき、どうなってしまうのだろう。そんな事を考えながら、ぼくは最後の力を振り絞った。午後3時をまわったばかりだった。

ニンチン・カンサの山頂は、思っていたほど広くなく、雪庇と隣り合わせになっていた。ほんの数えるほどの時間しか展望は見えなかったけれど、あきらかに空は近かった。

ぼくは雪の上に座り込んだまま、何度も何度も深呼吸をした。そして、自分の力のなさを痛感した。「もっと、もっと強くなりたい。そして、幾つものヒマラヤの山を登ってみたい」そんな事を感じていた。

そして下降が始まる。デポ地点からPPロープを5本張った。ぼくらの下降用とB隊の登降用だ。これで残りは2本のロープと2本のスノーバーだけとなる。そこからのC2までの長い下降は、3回の懸垂と、スタカットで降りる。斎藤君を真中



▲南西稜ジャンクションピークから見る頂上

にして、野沢井さんとぼくとでお互い確保をしながら果てしなく続いた。あんなに小さかったC2が暗くなり始めた視界の中で、だんだん大きく見えてくる。

ぼくらがフラフラになって、C2にたどり着いた時は、もう9時になろうとしていた。隊長に無線を入れて、ぼくらはそのままテントになだれ込み、チョコレートを溶かして、コッヘルをまわした。それがぼくらのその晩のささやかな登頂祝이었다。ぼくはもうずっと両足の指の感覚がなかった。その時は野沢井さんの両足の指の感覚もなかった事をぼくは知らなかったんだ。

そして、またシュラフカバーだけの夜が始まった。

翌日は、そのままB隊のサポートに残る野沢井さんを残して、斎藤君と2人でぼくらは下降を始めた。C1までの懸垂下降で、B隊の日南さん、志村さんとすれ違う。2人とも元気いっぱい、2日前の自分を見ているようだった。

ぼくらはそのままC1のキャンプを撤収し、そこにあるすべてのものを背負い、ロープを1本回

収してベースを目指した。おそらく2人とも、30kg近くになっていたと思う。ただ疲れ過ぎていて、そう感じただけかも知れない。でも2人共、一度ザックを降ろすと、なかなか立ち上がれなかった。

ぼくらはRCに少し荷をデポし、お互いバラバラになってベースに向かう。何日か前に、酒井隊長が23分で駆け降りてきた（本人いわく、酒が切れて1分でも早くベースで酒盛りしたかったらしい）ベースまでの道のりがとても遠く感じた。

1時間半が過ぎ、「いったい、いつになったらベースに着くんだよ」と思い始めていた頃、「おい！」とベースから隊長の声が聞こえた。「ああ、これでやっと終わったんだな」と思いながら空を仰ぐと、ころなしに空が遠く感じた。

出迎えてくれた連絡官の玲玲さん、コックの余さんと握手をする。そして酒井隊長は、両手を広げてぼくを迎え入れてくれた。

「見てみろよ宮川、あの山を！オマエはあのでっぺんに立ったんだぞ！」そう笑いながら話す隊長と2人して見上げると、ニンチン・カンサは偉そうに、堂々と聳えて見えた。（記：宮川真一）



▲ 8月15日、BCからは終日西稜が明瞭に見わたせた

登山以後

8月20日（月）BC→拉薩

7：30朝食、食事後よりBCの撤収作業。8：30に先陣のヤクが到着するが、チベット人の作業がテキパキ行われるわけが無く、ぼちぼち荷を積み終えたヤクに付いて順次出発する。最後のグループは10：00頃BCを後にしたようだが、暴れヤクが一頭いて、途中荷を振り落として暴走？したが、11：00頃にはマヨン村に全員到着。トラックとランクルはすでに来ており、物見高いチベット人が用も無いのに大勢集まっている。連絡官はヤクの荷役代の値上げ交渉に憤然と立ち向かい、交渉成立（打ち切り？）の11：30、ランクル出発。最後にニンチン・カンサを見上げたが、ガスに包まれ姿を見ることは出来なかった。12：30ランカーズ到着、昼食。毎日BCでお腹いっぱい食べていた筈なのに、何故か皆ガツガツしている。隊長は、やっぱり瓶ビールのほうが美味しいと御満悦。13：30にランカーズを出発、カンパ・ラからも鋭峰を見ることは出来なかったが、道は順調で17：00拉薩に到着。拉薩和平飯店に宿泊、協会と各々家族に無事下山の連絡を入れる。

8月21日（火）荷物整理

朝食後ホテルを変わることで、西藏郵電賓館へ移動。10：00から登山協会の倉庫で荷物整理。トラックから荷を下ろし、テントを広げ始めると雨がパラパラ落ちてきたのも束の間、じきに日が射し暑い中での作業になる。装備を乾かし、補修し、デポ品も含め全ての装備を広げて整理し直す。途中連絡官より冷たいジュースの差入れを戴き、13：00片づけ完了。この日を中日に3日間、チベットの祭りの最中だということで、昼食後ダライ・ラマの離宮ノル布林カに観光に出掛ける。色鮮やかな衣装に身を包んだチベット人の踊りを見物している間に、野沢井氏はペットボトルでチャンを手に入れていた（マヨン村製よりはるかに美味しい）。夕食は、中国登山協会の張江援氏を交えて火鍋レストランへ。連絡官は「しゃぶしゃぶ」と通訳していたのだが、かなり違うもののような気がする…。「辛くて、油っこくて、食べ過ぎ！」今夜は胃腸の三重苦。

8月22日（水）拉薩市内観光

朝起きて、まずお腹を下した。やはり昨日の火鍋は強烈だったらしい。朝食時も皆元気が無い。9：00にホテルを出て、まずポタラ宮を観光。宮殿の上部まで車で一気に上がる。内部はとても複雑な造りで、順路に沿って見学したが何処をどうまわったんだか、部屋の数が多すぎて目が回りそう。納められている仏像や立体の曼荼羅や部屋の壁の模様など、どれをとっても素晴らしいのだが、M氏とS氏はお腹の調子が悪くてそれどころではなかったらしい。最上階で記念撮影をした後、外階段を延々と下りながら何度も見上げた宮殿は、チベットの真っ青な空をバックに凛とそそり立っていた。車でジョカンへ移動して11：30から1時間、バルコルの土産物店を茶化しながら一周コルラする。チベット人は商魂たくましく、こちらが少しでも興味を示そうものなら腕を掴んで離さない。昼食後ホテルに戻って自由行動になり、私は再びジョカンへ出掛けて買い物の続きを楽しんだ。夕食は昨日の張氏にドウ・チャンシェン氏を加えて、水餃子を食べに行く。贅沢にも豪勢な料理に飽きてきて、庶民的な食堂のほうがほっとする。夜ホテルにコックの余偉氏がお別れに来てくれる。

8月23日（木）拉薩→成都

まだ夜の明けない6：40に拉薩を出発、8：10にクンガ空港に到着。途中どしゃ降りの雨になり、まさか飛行機が飛ばないのでは…と嫌な予感がする。案の定、成都から来た便が着陸できずに引き返したとアナウンスがあり、チェックインはしたものの足止めを食らうことに。

14：30、予定より5時間遅れで離陸。チベットよ、



▲ありがとう、趙玲玲さん、余さん

再見！

16：00すぎに成都に無事着陸、17：30に拉薩大酒店に到着。夕食は名物の陳麻婆豆腐店へ。噂どおりの、「シビれる辛さ」だった。山形ヤルラ・シャンボ隊と隣のテーブルになったが、あちらの食欲には一同、目が点…。

8月24日（金）成都→北京

今日は昨日と違って定刻に成都を発ち、10：00すぎに北京到着、登山協会交流部副部長に昇進された李豪傑氏の出迎えを受ける。北京前門飯店に宿泊、ホテルの劇場で少林寺を鑑賞しながらの昼食。午後は市内観光に出掛け、故宮博物院のスケールに圧倒されたあと、中国の銀座？王府井通りで買い物。夕食是北京ダックで登頂祝賀会、登頂者の野沢井・宮川・斎藤の3氏と酒井隊長が登頂証明書を、日南・志村はC2までの登高証明書を授与される。連絡官の趙玲玲女士のスカート姿には目を奪われてしまった。2次会は天橋飯店の日本料理店へ行き、1ヶ月ぶりのキンと冷えた日本酒を味わう。やっぱり日本の酒が世界一美味しい！

8月25日（土）北京→成田

7：00にホテルを出発、渋滞なく空港に到着したものの、搭乗手続きの列が機械の故障なのか一歩も進まない。出発時間ギリギリになってようやくチェックインでき、普段でもこんな状態なら、先日開催が決定したばかりの2008年北京オリンピックの辺りは一体どうなるのだろうと、他人事ながら心配になる。予定時間を30分ほど遅れて10：00に離陸、成田にはほぼ定刻に到着。出迎えの隊長夫人の姿を見つけたとたん、急に緊張感が抜けた気がした。あっという間にすぎたように感じた37日間だったが、留守中の日本のニュースお奥様に伺ってしばしの浦島太郎を実感しつつ、帰宅の途に就いた。

（記：志村真由美）

おわりに

今、こうして夏のニンチン・カンサ登山を振り返ると、あの山は「近くていい山」だったし、西稜は急峻にしていいいルートだった。

H A J事務局がまとめたこの山の登山史を振り返ってみようか。

*1985年秋、大分県山岳連盟隊（奥田勝彦隊長

ら13人）が南西稜から登頂を目指し、9月23日にアタックしたが、6,800mで登頂を断念した。同日、トゥゴロン峰に2人が初登頂した。

*86年春、中国チベット登山隊（ロツェ隊長ら20人）が入山し、4月18日、南西稜6,800m地点にC3を建設。28日、サンジュ、ジャブーら12人が初登頂に成功した。

*92年春、自衛隊山岳連盟隊（大崎直彦隊長ら6人）が入山。5月18日、日本人とチベット人各1人が登頂した。

*95年夏、栃木県高校体育連盟登山部（石澤好文隊長ら24人）が入山。8月11日、南西稜の6,600mにC3を建設し、17日、隊長ら4人が初登攀。続いて19日に5人、20日にも5人が登頂した。

*同年7月、福岡大学（山内一男隊長ら10人）と北京大学（張勤隊長ら10人）の合同隊が入山。8月17日、南面から菊池守ら4人が登頂。同日、中国側も登頂した。

*このあと、H A Jの2隊の登頂となる。

*99年、奥田仁一ら3人が栃木ルートに入山。5月30日に3人が登頂した。

*00年、川崎の坂原忠清（酒井の東京学芸大学の同級生）が東面の新ルートから初登攀したと聞いたが、詳細は不明。なお、坂原は今年も東面に入山したので、成果を期待している。

今後も、H A Jサマー・キャンプの山として、多くの人に登ってもらいたいものだ。

（記：酒井 國光）



▲高所順応風景（ラサの裏山にて）

2001年 パキスタン登山隊結果

No.	山 名	国 名	隊 長 名	結 果	備 考
1	ガッシャーブルムⅡ	フランス	Villard Emmanuel	○	1名死亡
2	〃	オーストリア	Erich Resch	×	
3	〃	オーストリア	Ervand Ilyinskiy	○	
4	〃	スペイン	Inigo Altubo	○	
5	〃	フランス	Schmidth Pierre	×	
6	〃	イギリス	Tomas Richardson	×	
7	〃	イタリア	Daniel Tonani	○	
8	〃	スペイン	Christophe Serre	×	
9	〃	栃木	大内 一成	○	
10	〃	スイス	Dsniel Schlieffateiner	○	
11	〃	イタリア	Pompili Giusoppe	×	
12	〃	ベルギー	Fohal	○	
13	〃	イギリス	David W Hamilton	○	
14	〃	明治大学	高橋和弘	○	
15	〃	ドイツ	Dieter Rapp	×	
16	〃	ドイツ	Robelt Rackl	×	
17	〃	ドイツ	Markus Hannes Walter	○	
18	〃	スペイン	Dario Bas Marin	○	
19	ブロード・ピーク	スイス	Marcel Kraaz	×	1名死亡
20	〃	フランス	Nicolas Sieger	×	
21	〃	エストニア	Toivo Sarmst	○	
22	〃	パキスタン・中国	Sangzhu	○	
23	〃	ブルガリア	Nikolay Mijaylov Petkov	○	
24	〃	アルゼンチン	Farnando Grajales	○	
25	〃	アメリカ	Paul Barry	○	
26	スパンティーク	南アフリカ	Joseph Tyrrell	×	
27	〃		森 ハツヨシ	×	
28	〃	ベルギー	Vanhees Jan	×	
29	〃	イギリス	David W.Hamilton	×	
30	〃		南井 英弘	×	
31	〃	スイス	Alex Sohlappi	×	
32	〃	埼玉	鳥 辰克	○	
33	〃	イタリア	Stelvio Lanzone	×	
34	ガッシャーブルムⅠ	明治大学	高橋和弘	○	1名死亡
35	〃	ベルギー	Graulioh	×	
36	〃	チリ	Ckaudio Galvez Santibane	○	
37	〃	カザフスタン	Ervand Ilyinskiy	○	
38	〃	ドイツ	Walter Hannes	×	
39	〃	スペイン	Alberto Inurrategui	○	

No.	山 名	国 名	隊 長 名	結果	備考
40	ナンガ・パルバット	ドイツ	Relf Dujimovita	○	1名死亡
41	〃	アメリカ・フィンランド	Edmund Viesturs	○	
42	〃	ドイツ	Edda Kraft	×	
43	〃	イタリア	Christian Kuntner	○	
44	K 2	韓国	Cha Joon Koo	○	
45	〃	ドイツ	Perter Guggemos	○	
46	〃	チェコ	Zdenek Hruby	×	
47	〃	韓国	Hyoung Woo Kim	○	
48	ディラン	ポーランド	Grzegorz Murawicz	×	
49	〃	学芸大学	村上 芳男	×	
50	バインターブラック	アメリカ	Hans Johnstone	×	
51	〃	スロベニア	Silvo Karo	×	
52	〃	ドイツ	Thomas Huber	○	
53	トランゴ・タワー	イギリス	Miohael V.Tumer	×	
54	〃	ブラジル (国際隊)	Waldemar Niclevioz	○	
55	〃	オーストラリア	Glenn Singleman	○	
56	K-7	アメリカ	Jamas K. Chin	×	
57	ティリチミール	フランス	Jean Pierre Franchon	○	
58	〃	イタリア	Mauro Peanchon	○	
59	マッシュャブルム	アメリカ・ロシア	Lev Loffe	×	
60	〃	イギリス	Royall Pater Charles	×	
61	ラトック I	ノルウェー	Halvor Hagen	×	
62	〃		山野井 泰史	×	
63	ラトック III	ロシア	Alexsnder Odintsov	×	
64	オグレ	アメリカ	Alois Brugger	×	
65	オグレ II	ドイツ	Thomas Huber	○	
66	ラカボン	フランス	Pellisseier Emmanuel	×	
67	パサー・ピーク	オーストラリア	Cormiar Michel	×	
68	イルグ・ゾム	フランス	Damier Gildea	○	
69	カブラ	オランダ	O.Doeser	×	
70	ジャンプ	オーストラリア	Glenn Singleman	○	
71	リンク・サール	アメリカ	Steve Swenson	×	
72	トランゴ・ネームレス	グレートジャングル	神田ショウゴ	×	

H A J で現在販売中の「中国地図」は下記のとおりです。いずれも中国語のものです。縮尺は全て10万分の一。販売価格は送料込み一枚2000円です。(中国科学院蘭州冰川凍土研究所製)

記

1. 珠穆朗瑪 (チョモランマ) 1991年
2. 喬戈里 (チョゴリ/K 2)
3. 希夏邦馬 (シシャパンマ)

4. 南迦巴瓦 (ナムチャ・バルワ) 1997年
 5. 納木那尼 (ナムナニ) 1997年
 6. 公格爾山〜慕士塔格 (コングール〜ムスターグ・アタ)
 7. 崗仁波齊 (カン・リンボチェ) 1997年
- この他に「青藏高原山峰図 (250万分の一)」と「中国山峰一覽図 (550万分の一)」もあります。こちらは送料込み一枚3000円です。

地域ニュース

《ネパール》

ダウラギリ I 峰で 3 人が行方不明

群馬ミヤマ山岳会が、ダウラギリ I 峰 (8,167 m) に派遣した登山隊 (星野龍史隊長(33)ら 4 人) の星野隊長、品川幸彦(33)、福本誠志(27)両隊員の 3 名が 10 月 14 日東壁 6,400 m ~ 6,500 m 付近を登攀している姿が確認された以降消息を断ち行方不明となった。その後のヘリコプターによる空からの捜索でも消息が得られず絶望とみられている。

一方、同隊で北東稜からの登頂を目指していた名塚秀二(47)隊員は、10 月 11 日登頂に成功したが強風のため左手と両足の指などに凍傷を負った。名塚隊員はこれでサガルマータ、チョゴリ、カンチェンジュンガ主峰の世界三大峰と、チョー・オユー、ダウラギリ I、ガッシャーブルム I & II、ブロード・ピーク主峰、シシャパンマ主峰の 9 座を 10 度登頂し、座数で故山田昇と並んだ。

ピサン・ピーク (6,091 m) で死亡

10 月 31 日、同峰 B C (5,800 m) で 8 人グループで登山していたナンバ・ヨシミツ(51)が登頂後、下山途中で高山病となり死亡した。

アピ (7,132 m) に登頂成功

バーバリアンクラブがアピ峰に派遣した登山隊 (野沢井歩隊長(37)ら 6 名) は、10 月 6 日に野沢井隊長と今村裕隆(42)隊員が登頂。8 日にも岩崎洋(41)、古谷朋之(29)、萩原文彦(23)の 3 隊員が登頂に成功した。ルートは北面から初登頂した同志社大学隊と同じで、B C (4,000 m) から、4,950 m 地点に C 1、5,600 m 地点に C 2、6,000 m 地点に C 3 を出して登頂したもの。尚、登山終了後、ティンカール・パスのトレッキングも行った。

無名峰 (6,229 m) に登頂

大阪山の会がムスタンに派遣した登山隊 (大西保隊長(60)ら 8 名) は、ツァーラン西方の無名峰

の登頂に成功した。

《中国》

ヤンラ・カンリ (7,429 m) 登頂断念

H A J がチベットに派遣したヤンラ・カンリ登山隊 (山森欣一隊長(57)ら 8 名) は、10 月 24 日、東稜 6,900 m 地点に佐藤英樹登攀隊長(53)、田村正勝(59)、太田康夫(49)、萬徳清孝(48)の 4 名が到達したが、装備類を使い果たしたことなどで登頂を断念した。尚、詳細は次号に報告予定。

チョー・オユー (8,201 m) 登頂ラッシュ

今秋のチョー・オユーでは、日本人の登頂が相次いだ。登頂者は下記のとおりである。

9 月 21 日 山田淳(21) 22 日 日比栄子(59)、安村淳(55) 24 日 大石明弘(21)、平出和也(22)、10 月 8 日 片山右京(38) 宇佐美栄一(35)、九里徳泰 10 月 9 日と 11 日 田辺治(40)、瀧根正幹(49)、三好学(34)、大谷日佐夫(32)、花谷泰広(25)、鈴木幹夫(34)

ナムナニ (7,694 m) 登頂

ナムナニの登頂を目指していた関西大学の奥田仁一(35)と山田晋(20)ペアは、9 月 25 日西面の初登ルートから登頂に成功した。

ヤルラ・シャンボ (6,635 m) 登頂断念

山形県山岳連盟が創立 50 周年を記念して派遣したヤルラ・シャンボ (ラサの南東約 135 km) 登山隊 (伊藤吉樹隊長(43)ら 18 名) は、悪天候に悩まされ登頂を断念した。

サンルン (7,095 m) 登山中止

ナムチャ・バルワ (7,782 m) の東にあり、未踏峰として注目を注ぎていたサンルンの初登頂を目指していた日大桜門山岳会隊 (中村進隊長ら 3 名) は、情勢の変化で許可が取得できず登山隊の派遣を断念した。

今夏のムスターグ・アタ

田部井淳子(61)ら4名の登山隊は、8月12日に田部井、渡辺玉枝(62)、大神田伊曾美(57)の3名が登頂に成功。奥田仁一(34)と合川美雪(40)ペアは8月11日登頂。労山隊(近藤和美隊長(59)ら4名)は悪天候のため登頂を断念。東京農工大隊(小口順史隊長ら6名)は隊長ら3名が登頂。国際公募隊の荒山孝郎は断念。この他に日本人男性1名も入山したが断念。

カシタシ(6,691m)初登頂成る

長野県の信高山岳会が、コンロン山脈のカシタシ峰に派遣した登山隊(宮本義彦隊長(56)ら4名)は、8月12日北稜から初登頂に成功した。登頂者は宮本隊長と大西浩(41)、下岡英樹(39)、田中広樹(25)3隊員。同峰はカシタシ山群の主峰でセリックラム・ムスターグとも呼ばれている。同隊は昨年に続いての挑戦で3,800m地点にBC、ABC(4,500m)、C1(5,170m)、C2(5,920m)、C3(6,200m)とキャンプを設けて成功したもの。

シシャパンマ中央峰(8,008m)に登頂

雪標山岳会がシシャパンマに派遣した登山隊(奈良慧隊長ら5名)は、北東稜から中央峰(8,008m)に10月11日増田隆(41)、野高健司(30)両隊員がHAP3名と共に登頂した。

トピックス

第23回 インド・ヒマラヤ会議開催

恒例のHAJ主催「インド・ヒマラヤ会議」は2002年1月27日(日)午前9時～17時の予定で「豊島区立勤労福祉会館」で開催される。問い合わせ、申し込みはHAJ事務局まで

Books

より高く、より遠く、未知を求めて

「京一中、鴨沂、洛北高校山岳部OB会」である「北山の会」がコンロンに派遣した登山隊(高橋脩隊長(68)ら17名)は、2000年8月13日に「KOR65(6,540m)」に初登頂に成功したが、その

報告書である。

登山隊の14名は全員55才以上の熟年者であるが、山探しの経緯などが詳しく報告されており、未踏峰を目指したい登山愛好者にとっては参考になる報告書である。(記：山森)

A4判 157頁 カラー16頁 〒606-0831

京都市左京区下鴨北園町20-1 中村淳 気付

垂直の星(吉尾弘遺稿集)

不世出のクライマー、労山会長現職のまま谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジ登攀中の2000年3月上旬遭難死した吉尾弘の遺稿である。

登ってきた道／壁から壁へ／嵐のひと夏／対談 素顔の吉尾弘の各章から成っているが、「嵐のひと夏」の章には、1978年初登頂したネパール・ヒマラヤのパビール峰(ガネッシュ・ヒマールIV峰7,052m)の報告が載っている。(記：山森)

A5判 406頁 日本勤労者山岳連盟編

本の泉社 2190円＋税 2001年9月25日刊

ヒマラヤン・グリーン・クラブ レポートNo.9

パキスタンで植林を中心に活躍しているHGCの活動報告書。植林／教育／医療・保健・衛生／生活基盤／その他の各章にまとめられている。

尚、HGCは創立10周年を迎え、明年2月10日に永田秀樹氏と峯尾武男氏の講演を含む祝賀会を予定している。

A4判 76頁 2001年11月1日刊

〒520-0843 大津市北大路3-15-7

遠藤京子方

東京集会のお知らせ

日時 12月25日(火)午後7時～
内容 忘年会
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

2002年H A J 登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシヤパンマに新ルートを求めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追いかけて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部（横浜）、95年マカルー東稜下部（JAC）、97年K2西壁上部（JAC東海）など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・ユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシヤパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央部に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J 隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂し

ないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちがそこが「8,000m」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。中央峰の標高が8,000mを切ることも有りえない訳ではないだろう。

シシヤパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的な困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えています。意欲ある岳人の参加を期待します。

記

1. 時期 2002年9月10日～11月8日（60日間）
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J 事務局

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
TEL: (03) 3740-2674 (直)

山小屋の主人の 炉端話

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取つて置きの話。

工藤隆雄 著

1500円

すぐ役立つ 山の花学

【飛騨高山の花博士】として知られる著者の、山の花見術入門書。

小野木三郎 著

1456円

すぐ役立つ 山の気象と救急法

山の気象遭難を回避するための天気判断と事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。

飯田睦治郎 著
桜井博幸 著

1359円

すぐ役立つ 記念日の山に登ろう

人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山は「1」。

石井光造 著

1300円

山の百名水

山岳写真歴30年 北海道 利尻から尾久島まで、山の百名水を取材。

山下喜一郎 著

1553円

北アルプス やまびと物語

【岳人】に3年余り連載した「山人探訪」男達の賦に加筆、登山をより楽しむための一冊。

柳原修一 著

1456円

北アルプス 山小屋物語

歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。

柳原修一 著

1456円

花と歴史の50山

「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。

田中澄江 著

1359円

改訂増補 六十歳からの日本三百名山

60歳から13年間で三百座を踏破したスーパードクターの山行記。

田中三郎 著

1456円

新・山靴の音

選歴をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著

1262円

中高年登山 なんでも百科

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむよう、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著

1500円

さわやかに山へ

世界的な女性登山家が初歩からアルプス、ヒマラヤを歩き、山を楽しむ安全な下り方と心得を伝えている。

田部井淳子 著

1500円

登山の運動生理学百科

「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。

山本正嘉 著

2000円

山書散策

今まで数多く発行された山書、何を読んだらいいか、そんな時の指針として「山人」連載時から好評。

河村正之 著

1500円

※東京新聞の販売店でも取り次ぎいたします。※本体価格に消費税が加算されます。

K 2 入 山 者

〔1975—2000=26年間〕

(注)派遣母体後ろの()内は登山隊員+報道隊員等であるが、学術隊員、医師などは登山隊員とした。氏名の×印は、その登山で死亡したもの。

〔1〕1975年夏・偵察〔パキスタン側〕

HKT (5)

隊長：広島三朗(32)／隊員：柏計雄(22)、小杉礼一郎(21)、今中邦雄(21)、河内敏弘(22)

〔東面6,000mまで到達〕

〔2〕1976年夏・偵察〔パキスタン側〕

HKT (7)

隊長：高塚武由(33)／隊員：馬場口隆一(29)、小林利明(27)、酒井秀光(27)、林原隆二(26)、小杉礼一郎(22)、山崎佑和(24)

〔3〕1977年夏〔パキスタン側〕

日本山岳協会 (38+9=47)

隊長：新貝勲(48)／隊員：吉沢一郎(73)、原田達也(42)、深田泰三(45)、広島三朗(34)、土森譲(40)、中村省爾(34)、森田勝(39)、小野寺正英(33)、重廣恒夫(29)、副島勝人(32)、高橋俊紀(28)、宇部明(28)、大塚岩夫(26)、小林利明(28)、瀬戸進(25)、岸順之(30)、渡辺優(27)、中込清次郎(30)、酒井秀光(28)、高塚武由(34)、宇津孝男(27)、馬場口隆一(30)、柏計雄(25)、小杉礼一郎(23)、丹生統司(28)、林原隆二(27)、賀集信(28)、山本秀夫(27)、森田富雄(30)、谷野彪(31)、寺西洋治(30)、北崎映次(29)、小西信二(28)、門田完司(27)、内田志郎(32)／学術：塚本圭一(46)、宮森常雄(44)／報道：松尾良彦(42)、門田龍太郎(45)、瀬川順一(63)、阿久津悦夫(39)、川本茂(43)、赤松威善(41)、塚本公雄(29)、田代啓史(27)、久坂信輔(43)

〔8月8日に南東稜から重廣、中村、高塚の3名が第二登に成功。9日にも広島、小野寺、山本とパキスタン人のアシュラフが登頂した〕

〔4〕1981年夏〔パキスタン側〕

早稲田大学 (12+1=13)

隊長：松浦輝夫(47)／隊員：米本隆夫(33)、大谷映芳(33)、薮田晴重(32)、山下松司(31)、恵

秀機(29)、大杉直芳(27)、衣川信行(25)、高田隆一(27)、岩田修(23)、桜井克実(23)、斉木和夫(32)／報道：小松義夫(34)

〔8月7日西稜から西壁をトラバースして上部南々西稜から大谷とパキスタン人のナジールが初登攀に成功した。尚、登頂者2人と山下は6日南々西稜上部でフォースト・ビバークして山下が残り登頂したもの。〕

〔5〕1981年秋・偵察〔中国側〕

日本山岳協会 (5)

隊長：小西政継(43)／隊員：原田達也(47)、坂下直枝(34)、佐藤英雄(32)、落合守和(32)

〔北稜の北西壁側を10ピッチ登攀した。〕

〔6〕1982年夏〔中国側〕

日本山岳協会 (45+4=49)

隊長：新貝勲(51)／隊員：小西政継(43)、高見和成(36)、重野太肚二(38)、川村晴一(34)、坂下直枝(34)、佐藤英雄(32)、吉野寛(31)、尾崎隆(29)、×柳沢幸弘(26)、落合守和(32)、×坂野俊孝(37)、原田達也(47)、辻美行(34)、禿博信(30)、岡野孝司(31)、森本学(32)、柿下哲雄(32)、橋本利治(31)、岩本敏己(29)、高山孝一(29)、堀江泰仁(29)、今村裕隆(23)、花田政一(24)、浜修一(24)、池内功(29)、木村辰夫(29)、成田嘉治(27)、井上茂(28)、奥村孝(26)、永島基(22)、松本卓己(28)、武川俊二(27)、二村秀広(25)、山下勉(29)、関崎健弘(26)、川那浜一(24)、星野貢(34)、佐々木慶正(27)、増島達夫(29)、上栗優一(24)、山中保一(29)、中尾登志夫(31)、荒井和夫(30)、伊藤昭司(32)／報道：今井幹雄(43)、山田新(36)、白井久夫(49)、路谷龍夫(48)

〔8月14日北稜から上部で北面に抜けて坂下、柳沢、吉野の3名が初登攀に成功したが、帰路ビバークとなり、翌日、柳沢が8,000m付近から墜落死亡した。15日にも高見、重野、川村、禿が登頂に成功。登頂終了後の8月29日BHの裏山に出掛けた坂野が31日遺体で発見された。〕

[7] 1985年夏 [パキスタン側]

日本ヒマラヤ協会 (16)

隊長：飛田和夫(39)／隊員：中岡久(35)、山田昇(35)、吉田憲司(32)、山田修(45)、伊地知博(44)、遠藤喜重郎(38)、土谷正伸(34)、武部秀夫(32)、石田勇悦(31)、細貝登(31)、村上和也(30)、坂上利明(29)、熊田雅史(29)、岡田勇孝(27)、塩田純一(35)

[7月24日南東稜から吉田、山田、村上の3名が登頂に成功した。山田は無酸素登頂。]

[8] 1987年夏 [パキスタン側]

高山研究所 (8 + 2 = 10)

隊長：遠藤晴行(30)／隊員：遠藤由加(21)、高橋堅(29)、鴨川正昭(39)、鈴木秀雄(27)、東樹義夫(35)、中村幹彦(34)、遠藤克昭(47)／報道白旗史朗(54)、高取剛充(27)

[南東稜7,400mに到達したが、隊長が5,800m付近で原因不明の上半身痙攣となり昏倒した]

[9] 1987年夏 [パキスタン側]

東洋大学 (12)

隊長：大滝憲司郎(39)／隊員：×鈴木章(32)、石渡武夫(43)、長岡薫(32)、斎藤文秀(31)、半澤哲永(25)、本多紀幸(23)、鳥谷越明(22)、黒澤徹(19)、菅原昭彦(25)、川崎浩史(23)、横溝岳彦(23)

[南東稜8,350mまで到達したが、8月24日アタック中止して下降中の鈴木がC4へ戻らず探索の結果、南壁基部付近で遺体で発見された]

[10] 1990年夏 [中国側]

横浜山岳協会 (11 + 1 = 12)

隊長：岸本五三男(51)／隊員：植木知司(59)、福島正明(39)、名塚秀二(35)、今村裕隆(31)、鎌田健二(29)、岸順之(43)、熊谷豊(41)、渡部弘(29)、小村恭子(26)、土屋恒篤(55)／報道：星野渉(27)

[8月9日北西壁から上部北面82年日山協ルートに出て登頂。名塚と今村が下部北西壁初登攀に成功した]

[11] 1994年夏 [パキスタン側]

隊長：小西浩文(32)／隊員：篠原達郎(38)、棚橋靖(31)、依谷久義(43)

[7月21日南東稜7,200mまで到達]

[12] 1994年夏 [パキスタン側]

日本教員 (11)

隊長：坂原忠清(49)／隊員：松井公治(43)、鈴木博夫(37)、成田泰樹(29)、戸高雅史(32)、加藤富之(35)、北村俊之(31)、村上映子(45)、津戸厚子(49)、大神田伊曾美(50)、八尾増子(49)

[8月14日南東稜8,360mまで到達]

[13] 1996年夏 [パキスタン側]

アルパインクラブFOS (2)

隊長：戸高雅史(34)／隊員：戸高優美(27)

[7月29日南東稜から戸高隊長が単独アルパイン・スタイルで登頂に成功した。]

[14] 1996年夏 [パキスタン側]

日本山岳会青年部 (19)

隊長：山本篤(33)／隊員：松原尚之(31)、谷川太郎(29)、稲葉英樹(32)、松本伸夫(31)、赤坂謙三(28)、亀山哲(28)、岡本憲(27)、長久保浩司(27)、村田文祥(26)、椎名厚史(26)、安島伸一(26)、吉田裕一(26)、竹内洋岳(25)、朱宮丈晴(24)、佐野崇(24)、高橋和弘(23)、豊嶋匡明(22)、高貝喜久雄(56)

[8月12日南々東リブから谷川、村田、松原、吉田、椎名、赤坂が登頂。14日にも同ルートから山本、竹内、稲葉、高橋、佐野、長久保も登頂した。]

[15] 1997年夏 [パキスタン側]

日本山岳会東海支部 (9)

隊長：田辺治(36)／隊員：金田博秋(49)、瀧根正幹(46)、中島明(35)、山田良二(34)、小林正己(32)、三好学(31)、鈴木幹夫(30)、中川邦仁(28)

[7月19日下部西稜から上部西壁を経て田辺、鈴木、中川が上部初登攀。28日にも瀧根、中島、山田、小林がHAP4名と登頂した。但しネパールのHAP10名を使用した。]

[16] 1999年夏 [パキスタン側]

G登攀クラブ (7)

隊長：藤原拓夫(43)／隊員：小野奨造(35)、井納吉一(40)、鈴木正幸(50)、新野泰之(34)、須藤美智雄(40)、古谷野正士(27)

[西稜7,500mまで到達]

[17] 2000年夏 [パキスタン側]

日本K2登山隊(4)

隊長：寺沢玲子(48)／隊員：山野井泰史(35)、
山野井妙子(44)、飛田和夫(54)

[東壁を断念した山野井泰史が7月30日南々東
リブからアルパイン・スタイルで単独登頂。同
ルートをトライした飛田と山野井妙子は、7,500
mに到達した。]

[18] 2000年夏 [パキスタン側]

日本勤労者山岳連盟

隊長：近藤和美(58)／隊員：倉橋秀都(40)、矢
野利明(47)、島田恭司(52)、松本政英(36)、上
野幸人(46)

[8月8日南東稜上7,400mに倉橋が到達した]

[19] 2000年夏 [中国側]

東京YCC(4)

隊長：坂本正治(40)／隊員：北村俊之(37)、道
家博司(33)、船山和志(27)

[8月19日北稜7,600m付近に到達したが断念]

◎無酸素登頂者

坂下直枝(1982.8.14 北稜) 柳沢幸弘(1982.
8.14 北稜) 高見和成(1982.8.15 北稜) 重
野太壯士(1982.8.15 北稜) 禿博信(1982.8.
15 北稜) 川村晴一(1982.8.15 北稜) 山
田昇(1985.7.24 南東稜) 戸高雅史(1996.7.
29 南東稜) 山野井泰史(2000.7.30 南々東
リブ)

◎初登攀

西稜から上部南々西稜(1981.8.7) 大谷映芳
北稜から上部北面(1982.8.15) 坂下直枝、柳
沢幸弘、吉野寛
北西壁から上部北面(1990.8.9) 名塚秀二、今
村裕隆
西稜から上部西壁(1997.7.19) 田辺治、鈴木
幹夫、中川邦仁

◎単独登頂者

戸高雅史(1996.7.29 南東稜)
山野井泰史(2000.7.30 南々東リブ)

◎最年少登頂者

高橋和弘(1996.8.14 南々東リブ 22歳と305日)

◎最高令登頂者

滝根正幹(1997.7.28 西稜～西壁 45歳と284日)

20世紀日本人 K2 登頂者リスト

No.	氏 名	生年月日	ル ー ト	登頂年月日	年	備考
01	重 廣 恒夫	1947,10,	南東稜	1977,8,8	29	第2登
02	中村 省爾	1942,5,	南東稜	1977,8,8	35	第2登
03	高塚 武由	1942,8,	南東稜	1977,8,8	35	第2登
04	×廣島 三朗	1943,3,	南東稜	1977,8,9	34	
05	小野寺正英	1943,10,	南東稜	1977,8,9	33	
06	山本 秀夫	1949,12,	南東稜	1977,8,9	27	
07	大谷 映芳	1947,4,	西 稜	1981,8,7	34	初登攀
08	坂下 直枝	1947,2,	北 稜	1982,8,14	35	初登攀・無酸素
09	×柳沢 幸弘	1955,2,	北 稜	1982,8,14	27	初登攀・無酸素
10	×吉野 寛	1950,2,	北 稜	1982,8,14	32	初登攀
11	×高見 和成	1945,5,	北 稜	1982,8,15	37	無酸素
12	重野太壯士	1943,4,	北 稜	1982,8,15	39	無酸素
13	×禿 博信	1951,10,	北 稜	1982,8,15	30	無酸素
14	川村 晴一	1947,12,	北 稜	1982,8,15	34	無酸素
15	吉田 憲司	1953,1,	南東稜	1985,7,24	32	
16	×山田 昇	1950,2,	南東稜	1985,7,24	35	無酸素
17	村上 和也	1955,3,	南東稜	1985,7,24	30	
18	名塚 秀二	1954,11,	北西壁	1990,8,9	35	初登攀
19	今村 裕隆	1959,4,	北西壁	1990,8,9	31	初登攀
20	戸高 雅史	1961,12,	南東稜	1996,7,29	34	無酸素・単独
21	谷川 太郎	1967,6,	南南東リブ	1996,8,12	29	
22	村田 文祥	1969,10,	南南東リブ	1996,8,12	26	
23	松原 尚之	1965,3,	南南東リブ	1996,8,12	31	
24	吉田 祐一	1970,8,	南南東リブ	1996,8,12	26	
25	×椎名 厚士	1970,6,	南南東リブ	1996,8,12	26	
26	×赤坂 謙三	1968,4,	南南東リブ	1996,8,12	28	
27	山本 篤	1962,10	南南東リブ	1996,8,14	33	
28	竹内 洋岳	1971,1	南南東リブ	1996,8,14	25	
29	稲葉 英樹	1964,3,	南南東リブ	1996,8,14	32	
30	高橋 和弘	1973,10,	南南東リブ	1996,8,14	22	最年少登頂者
31	×佐野 崇	1972,10,	南南東リブ	1996,8,14	23	
32	長久保浩司	1969,4,	南南東リブ	1996,8,14	27	
33	田辺 治	1961,1,	西稜～西壁	1997,7,19	36	初登攀
34	鈴木 幹夫	1967,3,	西稜～西壁	1997,7,19	30	初登攀
35	中川 邦仁	1969,9,	西稜～西壁	1997,7,19	27	初登攀
36	滝根 正幹	1951,10,	西稜～西壁	1997,7,28	45	
37	中島 明	1962,3,	西稜～西壁	1997,7,28	35	
38	山田 良二	1963,12,	西稜～西壁	1997,7,28	33	
39	小林 正巳	1965,6,	西稜～西壁	1997,7,28	32	
40	山野井泰史	1965,4,	南々東リブ	2000,7,30	35	単 独

■ 寸 感 ■

ヤンラ・カンリ登山隊が中国に入国した翌日の9月11日、ニューヨークでビル爆破のテロ事件が発生した。ラサに帰った11月3日当局関係者から「山森は幸運だった。／爆破事件発生後、チベット未開放地域の登山隊は全てキャンセルした!!」とのこと。カン・リンポチェも禁止になった。／とか、ムスタン周辺の国境周辺自動車道路も閉ざされたとか、／平和でなければヒマラヤ登山は困難（山）

事務局日誌（11月）

- 2日（金） ヤンラ・カンリ隊、山森隊長ら下山報告（シガツェ）入る。
- 7日（水） ヤンラ・カンリ隊、佐藤邦彦隊員からネパール組帰国報告入る。
- 8日（木） ヤンラ・カンリ隊、山森隊長ら本隊5名帰国報告入る。
- 10日（土） ヒマラヤ361号発送
- 13日（火） 中国登山協会へ「中国登山研究会講師」招請状送る

- 14日（水） 「H A J 華甲望年会」出席者へ会場変更通知発送（岸体育館1Fへ変更）各報道機関へヤンラ・カンリ登山結果を送付
- 16日（金） 吉尾弘遺稿集「垂直の星」出版記念会（於エミール、遠藤、酒井、山森、尾形）
- 21日（水） 会費未納者へ納入のお願い発送
- 26日（月） 東京集会（14名）

ヒマラヤ No.362（1月号）

平成13年12月10日印刷 14年1月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ／総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
 (血中酸素飽和度測定装置／重量380g／単3乾電池4本使用／携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

■大阪営業所/〒530-0026

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田壺山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
- 神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外商部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004